

2021 年度白鷗大学入学式・式辞

—新しい「心の旅」を—

学長 北山 修

本日、ここに 2021 年度学部・大学院入学式を挙げるにあたり、大学を代表して、新入生諸君、ならびに、ご列席のご家族の皆様に対し、心からお慶び申し上げます。

皆さんは、これから始まる大学生としての日々に対する希望や期待に、さぞかし胸が高鳴っていることであらうでしょう。そして、大学院生として学問の高いレベルに挑戦しようとする皆さんは、熱い思いを燃やしておられることなのでしょう。私たちは皆様の新しい旅たちを祝うと共に、皆様を心から歓迎いたします。加えて、今日の晴れの日を心待ちにされ、長い間近くでそして遠くで見守ってこられたご家族の皆様の達成のお気持ちには、心からの尊敬の意を表するものであります。

さて、新入生の皆さん。皆さんは、「プルス・ウルトラ」、すなわち、「さらに向こうへ一歩踏み出すこと」を意味するこの言葉をご承知だと思います。「プルス・ウルトラ」とは、本学の創設者である上岡一嘉（かずよし）初代学長自ら示された本学のモットーであります。今立つ場所を踏まえ、もう一歩前に踏み出しましょう。それが「プルス・ウルトラ」の精神です。

実は、私は今年度から本学学長に就任いたしました。それで、上岡初代学長のことを記した以下のような文章を、二代目学長の原田俊夫先生の書かれた物の中より見つけました。

「平和を愛し、世界との共栄のうちに日本の位置付けを考え、異文化を進んで受け入れるようにしなければ日本の再生の望みは薄い、と彼は昼間の疲れを忘れたように熱っぽく私に迫ってきたものである。このように軍国主義と国家至上主義が強制される中であつても、彼は挫けず、弛まず、強く生き抜いてきたのである。」

このように上岡一嘉先生は異文化の受容を強調され、この白鷗大学に、私たちの今立っている場所のさらに向こうにあるものを見よ、そこに向かって鷗のように飛んで旅してみると言っているわけです。

それで本日は、旅の話をいたしましょう。この入学式で旅の話をする理由は、二つあります。

一つは、人生が旅であり、とくに皆様のような青年の時期が旅立ち、すなわち出発の時だからです。そして人生を旅に喩えることは、実は世界中の詩人が行っております。我が

国では、芭蕉が「奥の細道」で「月日は百代（はくたい）の過客（かかく）にして、行きかふ年も又旅人也」と語っております。この場合は、時間も月日も、そして私たちも皆が旅しているというわけです。そして、青年期が出発の時というのは、いよいよこれからは独り立ちで、それでしばらくは一人旅であるからでしょう。最終的には新たな誰かとの出会いのための旅でありながら、それは自分を発見し確立することになる旅でありましょう。それは決して、愉快的ことの連続ではありません。苦勞と冒険はつきものであり、危険もありましょう。またご家族には心配の種はつきませんが、「可愛い子には旅をさせよ」と言い、これは真実と思います。多くの歌で、君のゆく道は果てしなく遠い、遠い世界へ旅に出ようよ、どこか遠くへゆきたい、と言われてきた通りです。

さらに今、旅の話をするのは、実際の旅が現在非常に難しくなっているからです。コロナ禍で、私たちの外出が制限され、遠いところに出かけるのが難しくなっています。密になることを避けて、せっかくの良き日だというのに、参加されたい皆様の人数を制限せざるをえなくなり、今日はオンラインの参加を余儀なくされている皆様もおられます。また入学後も、テクノロジーの力を借りて遠隔の授業が続いて、コンパやクラブ活動も中止、自粛を余儀なくされているのです。つまり、しばらくは出発の時だというのに出発できないこととなります。これには皆様、本当に悔しい思いをされていることでありましょう。

しかしながら、ここで私から、もう一つの旅の提案があります。私は、皆様に「心の旅」に出かけて頂きたいのです。私は、精神科医で臨床心理学者ですから、心の中にも、外の現実と同じくらいに広がりがあると考えています。それは心の世界、心の宇宙と言ってもいいと思います。アンデルセンの創作童話「マッチ売りの少女」を引用するなら、寒い冬空の下、少女がマッチの火をつけて美味しい料理や愛してくれたお婆ちゃんの幻影を見たのがこの心の中です。心の外が寒くとも、心の中で私たちは暖かい世界を夢見ることができるのです。

夢、ファンタジー、空想、希望、夢想、幻影、こういうものが生まれるところが心の世界なのです。ここを、テーマパークのファンタジーランド、あるいは冒険映画やファンタジー小説で満たすのもいいのですが、それを自分の想像や自分の夢で満たすことも、私たちにはできるのです。

具体的には、大行寺キャンパス東側 思川にある桜堤のベンチに座り、これまでのことを考え、そして未来に想いを馳せてみてください。そしてそれを言葉でなぞると、やがて自分の人生が物語になることがあります。我が国には、私小説や日記文学の伝統があり、日本人は自分の人生を物語として語るのが得意と言えます。

そこで、私は気がつくのが、この一年くらいの思い出が実に少ないのです。確かに振り返ると、コロナでどこにも行けず、特に何もしてなかったのも、一年間何もなかったように感じる方も多いことでしょう。現実には、具体的にどこかに行ったり特に何かをするならば記憶が残り、それを写真も撮ったりもするので、記録され、思い出しやすい。ところが心の旅は写真が撮れないので、実は文字で書いておかないと記憶に残りにくいのです。

そこで、提案なのですが、これからの一年間は、心に思いつくものを日記につけてみてはいかがでしょうか。すると、一年分の心の旅日記ができることになる。実は、自分の心のことを文字にして人生を語ると、心の健康を支えるというメリットもあるのです。

ただここで一点、注意が必要です。心の旅は、なかなか目的地にたどり着かないことです。「山のあなたに なお遠く「幸い」住むと 人のいう」という言葉で終わる、カール・ブッセの「山のあなた」が上田敏先生の訳で言う通りです。現実では探し物は見つかることはありますが、心の旅には終わりが無い。どこかに着いても、ああ、そのまだその向こうに幸せがあったんだなあと言われていたのです。「青い鳥」「虹の彼方」と言われるものはみなそうです。心の旅は果てしなくて、実は目的地を永久に探し続けるものです。

そして何か心の旅のガイドブックが必要なら、小説を読まれるのがいいと思います。私個人は今週に入って三日間かけて漱石の『こころ』を読みました。そして、昨日から『それから』と言う小説を読み始め、そのあとは『三四郎』を読もうと思っています。夏目漱石を読んだなんて、五十年ぶりくらいですが、この読書という一人旅も、深く、果てしない。

最後に、私たちは、校名の「白い鷗」の通り、本学は皆さんが羽を広げ飛んで行かれるための学力と体力、そしてそのための気力を養成するための環境でもありたいと思っています。広く見渡すなら、小山は、じっくり腰を落ち着いて、勉学に取り組む自然環境だけにとどまらず、世界遺産の日光や幕末まで続いた足利学校など、文化的環境に恵まれております。そしてその上、先生たち、諸先輩、そして事務の者たちという人的環境が揃っているのです。先生たちは、皆様が自分を作り、自分を発見する旅のお手伝いをさせていただくことになるでしょう。

さあ、皆さん、今日から「心の旅」に出発です。

旅立ちの日、それが入学式の意義でしょう。だから、心からご入学おめでとうございませと申し上げ、充実した旅となることを祈りたいと思います。